編集後記

▼本誌八〇号「二〇周年記念号」の編集中に、中越大震災が起きました。被災者の方々には心からお見舞い申し上げます。

急遽、この震災を小特集として組んだために発行が大幅に遅れてしまいました。なお、緊急にもかかわらず被災地の会員の方々から現地の状況を知らせる手紙をいただきましたので、それは「研究所通信」一〇二号に特集しました。あわせてお読みいただきたい。震災問題についての研究は今後じっくりと取り組んでいく予定です。

▼震災特集のインタビューに応えてくださった、立石雅昭さん、中村加代子さん、田口孝さん、宍戸真知さんに厚く御礼申し上げます。河合靖久さんは被災現地と研究所をつなぐ役割を果たしています。

▼二〇周年記念特集には友好団体や会員諸氏から多数のメッセージが寄せられましたことに感謝いたしますとともに、八〇号まで続けてこられた幸せを感じております。お褒めや励ましの言葉に応えられるように、さらに努めてまいります

▼八木所長は研究所二〇年の歩みを「研究所の理念とその展開」として、理念に即して長年の研究所の活動と経験を分かり易く解明しています。憲法と教育基本法を理念の第一において活動してきて、その「改定」問題が緊急になっていることは研究所の活動がいっそう求められる証です。国連決議等の国際的な基準を地域に即した教育改革と結ぶ視点は重要で、研究所の活動を世界史の流れのなかに位置づけようとする壮大な試みと受け止めました。

▼八鍬友広さんの論考は、教育基本法改定という事態をグローバル化という日本をとりまく環境の変化への対応という視点から、全面的にかつ鋭く解明しています。進行中の権力による教育改革の論理がよく理解されるでしょう。

▼三輪定宣さんは義務教育費国庫負担制度を憲法・教育基本法を実現する国の教育財政の基本原理として堅持すべき意義を説き「三位一体改革」によって廃止される動きに警鐘を鳴らします。

▼八木三男さんの随想「論言汗の如し」は、現代の天皇制の問題にふれながら保守的な政治家の偏狭なナショナリズム的思考や非人間性を浮き彫りにしています。天皇を人間ぽっい目で見ることの意味も読み取りました。

▼内山雄平さんはドイモイ政策下のベトナム農業教育視察旅行で見聞したホーチミン市やハノイの市民のくらしを紹介しています。

▼今井橋男さんは引きこもりのなかで、「共感」がどのように大切かを、いくつもの事例から導いています。臨床にいる人ならではの報告です。

▼亀山裕さんは「いじめ追放生徒集会」を成功させるまでの取り組みを、具体的に子どもらの姿と教職員の懸念も描き、ドラマのようです。後編が期待されます。（小板、吉田）

にいがたの教育情報 NO. 80

2004年12月15日発行

編集・発行　にいがた県民教育研究所

発行人　長崎　明

〒951-8116 新潟市東中通1－86 山崎ビル

電話・FAX(025)228－2924

振替口座・00640－0－12332

印刷所・中央印刷さぁびす

本誌内容の無断転載を禁じます。